

## 実践事例

(郷土) 美合小学校 4 年

# 輝 け ! 生 田 ボ タ ル

5 月 ~ 2 月 ( 1 5 時間 )

## 1 ねらい

- (1) ホタルの住みやすい川の環境作りに向けた手立てを考え、実践することができる。
- (2) ホタルの成長の観察を通して、自然界における生命の巧みさ、命の大切さに気付くことができる。
- (3) ホタルの飼育活動を通して環境に目を向け、環境保護への取り組みを発表できる。

## 2 実践の概要

本校では、4年生になるとホタルを通しての環境学習を行うとともに、マイホタル活動（ホタルの幼虫の飼育活動）を行う。子供たちのほとんどは、ホタルの飛翔を目にしたことがあり、幼虫がカワニナを餌としていることも知っている。しかし、飼育活動以前の子供たちにとって、光を放ちながら飛んでいるホタルの姿しか目にしてなく、環境とホタルを絡ませて考えたこともない。水においても子供たちは、「きれいな水」という言葉の示す意味を「透明で汚れの见えない水」ということにとどめ、水質というものを意識したことはない。

課題設定の過程においては、社会科「くらしをささえる水」で男川浄水場を見学し、「きれいに見える川の水」と「飲んでも安全な水道の水」の違いに気付かせ、水の環境についても意識させた環境学習への足掛かりとする。追究活動の過程では、身の回りの環境問題に関心をもたせ、自分たちの生活が他の生物に与えている影響にも目を向けさせていく。発信活動の過程では、追究活動を通して学んだこと、環境とホタル飼育の関係についてワークショップ方式で発信する。

ホタル学習を通してかけがえのない「命」というものを意識させる。自然を大切に、環境を守る気持ちをもたせることが、本校のE S D教育の一つである「命」にもつながる。ホタルの命から、自分の命に目を向けさせることで、命を大切に生活を考える人になってほしい。

## 3 実践を振り返って

### ①ホタルの卵を集めよう。

6月のホタル観賞会(右上(左)の写真)ではたくさんのホタルの飛翔が見られた。この後、ホタルの卵を確保して、産卵箱の中で孵化させた。今年度はたくさんのホタルの卵を確保することができた。右上(右)の写真は、産卵から約1か月後、孵化した幼虫を撮影してものである。授業の1場面である。幼虫の大きさは0.1mmにも満たないほどで、しっかりと見ないとわからないほどであった。しかし、体の大きさが幼虫と同じ1mm以下の大きさのカワニナを入れると、あっという間に右下の写真のように群がり、捕食していた。



### ②自分のホタルを育てよう (マイホタル活動)

ホタル学校での学習を終えた後、教室に水槽をもちこんでの飼育活動（マイホタル活動）を開始した。（右上の２枚の写真）給餌、水替え、観察など、こまめに世話をしている子が多く、幼虫は日に日に成長していった。右下の写真は、ホタルの幼虫がカワニナの殻に頭を突っ込んで食べているところの写真である。幼虫は、成長するにつれて体が柔らかくなり、ちょっとしたことで死んでしまう。そのため、子供たちは観察のために水槽を移動させるときも、とても慎重に行った。



### ③元気で大きくなってね（ホタル放流会）

ホタルの幼虫の山綱川への放流は、年２回行っている。９月の放流会は４～６年生が参加して行うが、学区の方も放流してもらえるように、飼育部の子が準備をしている。放流場では、大きく育て、来年、飛翔する姿を見せてほしいという願いを込めながら、ホタルの幼虫を放流した。



### ④ホタル飼育と環境の関係について調べたことを発信しよう

環境学習を通して、子供たちはホタルの保護活動は環境保護活動と同じであることに気付くことができた。そこで、１年間の学習のまとめとして学区の人に学習したことを発信することにした。観察や見学でまとめたノートを活用し、それぞれの班が自分たちで決めたテーマに沿って模造紙にまとめた。



そして、２月１４日の授業参観のときに、学区や家族の人に環境問題やホタル飼育で学んだことを発表した。（その後、使った模造紙はホタル資料室に掲示した）

## ４ おわりに

ホタルの飼育は子供たちにとって初めての経験であり、自分たちが考えている以上に大変で、大切な活動であることを、やってみてはじめて気付く子が多かった。

子どもたちが成長したときに、地球の環境が今のままであってほしいというのが教師の願いである。そのためにも、一人ひとりが環境を意識した生活を送ることが大切であると考えます。ホタルの飼育活動を通してもっと環境に目を向けさせたかったが、子供たちにとってこの問題は大きすぎて、十分に心の中に落としきれなかった。将来の環境を見据え、環境を意識した生活を心掛けさせるためにも、年間の計画をしっかりと立て、もっと多くの時間をかけてじっくりと子供たちに考えさせ、取り組ませることが大切であると感じた。